

聴覚障害生徒の英語意思伝達能力の向上を目指した取り組み

—生徒の英作文と外国人講師との対話内容を活用して—

廣瀬 由美

英語の授業において、聴覚障害をもった生徒同士が教員を媒介するのではなく、より直接的に、双方向の英語コミュニケーションを成立させる方法を検討することを目的として、生徒の英作文とそれに関する外国人講師との対話を題材として、生徒同士が相互に英語でコメントしあう授業を計画、実施した。通常の授業では英文の正確さを重視しがちであるが、生徒同士が英語で生き生きとやり取りを行うために基本表現教材を作成し、コミュニケーションの成立を支援した。その結果、教員の支援の工夫により、活動の意義を理解し、楽しみながら取り組むことができることが分かった。

キー・ワード： 英作文 生徒同士のコメント 英語意思伝達能力 外国人講師

1 はじめに

本校中学部では、英語コミュニケーション能力の向上のために、全校で行われているイングリッシュルームの取り組みに加え、年間 13 日ほどではあるが、外国人講師とのティームティーチングによる指導を行っている。外国人講師との授業は、1・2 年生の場合、「自己紹介」、「他己紹介(三単現)」、「林間学校(過去形)」、「映画」などをテーマとした英作文発表、それに関連した質疑応答、教科書の会話文を元にした対話練習(買い物、食事の注文、道案内、体調の確認など)を中心に、学級単位で授業を行っている。3 年生の場合は、「修学旅行」、「好きなこと、もの、趣味」、「日本文化」などをテーマとして英作文について、1 人 10～15 分程度外国人講師と個別に会話する形態で授業を行い、年度末にそのうちの 1 つを選んで他の生徒の前で発表するという活動を行っている。

聴覚障害生徒は、英語の音声だけでコミュニケーションを取ることが難しい。そのため、一斉授業の中で生徒が英語を話す活動においては、板書、個人用ホワイトボード、タブレット PC、電子黒板などを用いて文字として提示することが必要である。そのため、その場で自然にコミュニケーションするというよりは、準備した英文を発表する、あるいは日本人の英語科教員が外国人講師の発言を板書や通訳を

しながらコミュニケーションを行うというような活動が多くなりがちである。

そこで、本研究は、ICT 機器を活用することによって、外国人講師と生徒が個別に対話した内容について、生徒同士が教員を媒介するのではなく、より直接的に、双方向のコミュニケーションを成立させる方法を検討するために計画した。

2 対象、方法

英語でコミュニケーションを取るためにはある程度英語を習得していることが必要であると考え、対象生徒を 2、3 年生とした。

平成 29 年度には、3 年生の 1 学習グループ、2 年生 2 学級を対象として指導計画を立て、実践を試みた。その実践により、様々な改善点が明らかになった。

その結果を元に、平成 30 年度は、3 年生 2 学級 14 名を対象として実践を行った。その際の指導計画は Table 1 の通りである。

このような授業を通し、生徒がお互いの学習活動を振り返り、評価し合うことができ、次の活動に向けた見直しをすることができる。そして、このような継続的な学習活動を計画・実践していくことによって、外国人講師が担当しない通常の授業や家庭学習で培った英語力を実際のコミュニケーション場

面で生かすことができ、さらに学習意欲が高まると考えた。

Table 1 指導計画

| | 実施内容、時数 |
|---|--|
| 1 | テーマに沿って英作文を書く。(2～3時間) |
| 2 | 英作文を元に外国人講師と1対1で対話する。(1人当たり10分～15分程度。各学級2～3時間) |
| 3 | 英作文と講師との対話内容をパソコンで入力する。(1時間) |
| 4 | 学級ごとに他の生徒が入力したファイルを読み合い、英文でコメントをする。(1時間) |
| 5 | 大判プリンターで出力した他学級の生徒の英作文、講師との対話内容、生徒のコメントを読み、英文でコメントをする。 |
| 6 | 活動内容についてアンケートに回答する。 |

3 授業の様子

(1) 平成29年度の実践

当初の計画では、協働学習支援ソフトを活用することにより、即時的なコミュニケーションを促進する指導計画を立案したが、予算の関係で導入できなかったため、文書ファイルや画像ファイルのメール添付、Dropbox等のクラウドストレージソフト、ビデオ通話を併用するなど代替の方法を検討した。

授業時間外でもコミュニケーションを取ることができたという面では成果があったが、即時性が失われてしまったことが最大の課題として残った。

また、実践を通して、生徒の実態によって、即時的なコミュニケーションを成立させるためには様々な手立てが必要であることが明らかになった。具体的には、英語でコメントすることに対する精神的なハードルに対する適切な対応、まず教員が正しい英語にこだわらず、英語を使って伝えようとする姿勢を重視しそのことを繰り返し生徒に伝え表現を促すこと、英語力が不十分な生徒でもコメントしやすくなるような基本表現をまとめた教材(プリント)の

準備が課題として挙げられた。

(2) 平成30年度の実践

平成30年度は、前年度の実践の結果や授業を担当する学年の生徒の実態を踏まえ、授業計画を立案し、授業を行った。

① 英文入力方法についての教材

英作文を他の生徒に向けて発表する際は、手書きしたものをスキャンして、プレゼンテーションソフトなどで提示するという方法もあるが、学年が上がるにつれ、英文が長くなることもあり、平成16年度から3年生は卒業前最後の外国人講師との授業で行う発表会に向け、英文を入力し、プレゼンテーションソフトを用いて発表している。

日本語入力については、総合的な学習の時間や家庭生活上で習熟している生徒も多いが、英文入力の経験はあまりなく、同じ質問が多く挙げられたため、平成18年度に入力の際の注意点をまとめた教材(提示用教材と配付用プリント)を作成し、活用している。

半角英数にして入力すること、緑や赤の波線が表示された時の対応、コンマやアポストロフィーの入力方法など、過去に質問が多かったものをまとめたプリントになっている。

② コメント基本表現教材の作成

英語力が不十分なためにコメントに躊躇する生徒がいることは想定していたが、1グループ6～7人の集団で、すべて個別に対応することは非常に難しいので、よく使われる表現をまとめたプリント教材を作成し、活用することにした。

内容は、相手書いている内容に同意する、同意せずに別の意見や感想を述べる、感想として「驚いた」、「おもしろい」、「がっかりした」、「おいしそうだ」などと述べる、「お土産には何を買った?」、「次はどこへ行きたい?」など質問を投げかけるなどの表現を取り上げた。

教材を作成していて難しかったのは、片言でもいいということ伝えたいと思いながら、表現の例としてプリントに載せるとなると、どうしても英語表現を正確なものにしようとしてしまうことだった。

③ 大判プリンターによる他学級との共有

各学級で生徒同士がコメントし合った際は、各生徒がコメントシートに記入していき、交換して読み合うという形で進めたが、他学級で共有する際には一覧性を重視し、大型プリンターでまとめたものを貼り出し、それを見ながらコメントしていく方法をとった。

Fig. 1 は大判プリンターで出力した他学級の生徒の英作文、講師との対話内容、生徒たちのコメントを読み、英文でコメントをしている様子である。



Fig. 1 他学級の生徒の英文にコメントする様子

例えば、外国人講師から、When would you like to go there again? Tomorrow? The day after tomorrow? と尋ねられた生徒が答えに迷い、外国人講師が I want to next week because I forgot my umbrella. と答えることを提案し、その生徒がその答えを取り上げたところ、別のクラスの生徒が You forgot your umbrella? In fact, I'll go to Kyoto tomorrow. So, I'll bring your umbrella! But you must pay me 10,000 yen. とコメントするなど、講師や他の生徒の英語表現を参照しながら、積極的にやり取りを行うことができている生徒もいた。

4 アンケート結果

活動内容について、「英文入力」、「学級内での英文の回覧、コメント」、「他学級の英文の回覧、コメント」の3つについて、「難易度」、「楽しさ」、「有益性」「その他」の項目を設け、自由記述で回答を得た。

以下、抜粋して紹介する。

(1) 英文入力について

① 活動の難易度

ほとんどの生徒が入力だけなら特に難しくなかったと答え、活動が難しすぎることはないということが分かった。

② 活動の楽しさ

入力だけでは単調で面白くなかったという生徒もいたが、パソコンを使うこと自体が楽しかったという生徒が多く、中には「あまり、英文を入力することはないので、新鮮で楽しかったです」と答えた生徒もいた。

③ 活動の有益性

「日本語だけではなく、英語もスラスラと入力できるようにしたい」、「英語もしっかり打てるようになったら、どこかしら役には立つと思う」、「大人になり、海外に行く時に役立つと思う」などもあり、生徒自身も意義を感じながら活動することができたことが分かった。

(2) 英文の回覧、コメント

難易度、楽しさ、有益性とも、他学級でも学級内での活動と同じという記述がほとんどであった。個別に活動する場合も、大判プリンターで出力した様子をみんなで囲みながら活動する場合も、感じ方に特に大きな違いは見られないことが分かった。

① 活動の難易度

活動の難易度については、難しかったと答えた生徒と難しくなかったと答えた生徒はほぼ半数ずつであった。自由記述の内容を見ると、コメント基本表現教材から離れて自分の言葉でコメントを書きたいと考えた生徒は難しかったと感じたようだった。

② 活動の楽しさ

楽しさについても、楽しかったと答えた生徒と楽しくなかったと答えた生徒はほぼ半数ずつであった。自由記述からは、「他人のを見るのは好きだけど自分が書くのは正直あまり楽しくなかった」、「面白い解答があつて楽しかった」という記述があり、主に他の生徒の英作文を読む部分に楽しさを感じていることがうかがえた。

③ 活動の有益性

有益性については、「楽しさ」についての回答でも「難しかったけど、いい練習になった」というコメントがあったが、「もっとスラスラとできるように頑張りたい」、「仕事につながるから(少し役に立ちそう)」など、役に立ちそうと答えた生徒が多かった。

5 考察

従来、行っている外国人講師の個別のやり取りを他の生徒の指導に生かしていきたいという思いで、立案した計画であったが、知っている人同士の生のやり取りを題材とした授業になったため、既製の教材と比べ、生徒は関心をもって取り組む事ができた。

英語で即時に表現するには、精神的なハードルもあるが、易しいコメントの例をプリントにまとめて提示することにより、生徒にこれならできるという感覚を持たせることができ、コミュニケーション意欲を高めることができたように思う。

本校中学部には2名の英語科担当教員がおり、3学級ずつを担当している。担当するのは2つの学年だけであり、そのうちの1つの学年は1学級(学習グループ)のみを担当することになり、今回のように授業時間で他学級の生徒の英文を読んで相互評価を行うことが難しい場合もある。そのような場合には大判プリンターで印刷したものを廊下等に掲示し、担当していない学年の生徒も気軽にコメントできるようにするといった活動も考えられる。

6 まとめと今後の展望

本研究では当初、「コラボノート」という協働学習支援ソフトを活用することにより、コミュニケーションを促進することができるのではないかと考え計画した。「コラボノート」は1冊のノートをネット上で共有する感覚で複数の生徒・教員が1つのファイルをリアルタイムで読み書きできるソフトであり、インターネットを活用し、学校外の人と意見交換をすることもできる。リアルタイムに情報を視覚的に共有することができる点が聴覚障害生徒のコミュニ

ケーションに非常に効果的に働くと考えている。

協働学習支援ソフトを活用することにより、いつでもどこでも誰とでも学習に取り組むことができるので、導入することができれば、情報の視覚的な共有と生徒数の少なく活発なコミュニケーション活動の確保が課題となっている聴覚特別支援学校や難聴学級等の授業実践に対し、大きな波及効果が期待される。

また、ソフトを活用する際や、生徒達が成人してからのチャットなどを活用したコミュニケーションを考えると、手書きよりはタイピングやフリック入力で文字化していく方が望ましいと思われるので、即時的なコミュニケーションが可能になる入力技術の習得に向けた指導についても検討していきたい。

即時的なコミュニケーション方法を確立することができたら、より多様な外国人とのコミュニケーションを経験する機会を持たせるために、筑波大学や近隣の大学の留学生などにも協力を仰ぎ、直接、自分のことについて伝えたり、決まったテーマについて議論したりする機会も作っていききたいと考えている。また、様々な手立てや授業計画の工夫を検討し、対象を1年生にも広げていきたい。

〔謝辞〕

本稿で報告した取り組みの一部は、日本学術振興会研究費補助金・奨励研究(JSPS科研費17H00265)の助成を受けて行った。関係の方々に感謝申し上げたい。

〔参考文献〕

筑波大学附属聴覚特別支援学校(2018)イングリッシュルーム活動.附属学校国際教育推進委員会報告書(第9集)～2017年度～ 附属学校群の国際教育の推進,84-85.